

私の授業改善—2001 年度前期「比較文化」を題材として

吉永 契一郎

A Case Study of "Introduction to Comparative Culture"

Keiichiro Yoshinaga

"An Introduction to Comparative Culture" is an experimental course which attempts to overcome the limitations of the conventional one-way teaching methods, and to acquaint students to topics in a systematic way. The remit of the course includes reading, writing, presentation, and short tests. The use of the internet assists in the implementation and assessment of students' work in activities. An exit poll conducted among students indicated that the students enjoyed completing assignments and acquired a sense of achievement by the end of the semester. This would seem to confirm how necessary it is for teachers to incorporate interactive learning techniques into their programmes, and to concentrate on engaging students' attention during the course.

Key words: teaching design, instructional technology, self-learning, communicative skills

以下の報告は、今回で2年目を迎えた教養科目「比較文化」を担当した様子をまとめたものである。既に、口頭では9月27日の全学FDにおいて発表を行った。

今日、「教養教育」をめぐる議論は錯綜している。教養教育の目的が語られるとき、専門外の領域への関心の喚起から、コミュニケーション能力の育成、人格形成まで多岐にわたっており、それがそのまま、授業内容の多様性にも反映されている。

多様性自体は歓迎すべきものであるが、授業の目的、形態、評価方法については、学生と教師が共通の認識を共有する必要がある。これらが明確でない場合、戸惑うのは学生の方であり、教育上の効果も期待できないと思われる。

さらに、教養教育については、より多くの実践報告、相互批評が求められる。教師自らが、異なった切り口、教育方法に理解を示すこと自体が、教養教育の幅を広げると考えられるからである。

今回担当した「比較文化」は、講義として分類されるが、その主眼が、自己の意見の表明および異なる意見との対話にある。題材は、アメリカ社会であり、アメリカを鏡として見る日本社会である。

具体的には、人種差別、フェミニズム、性風俗など

を取り上げた。知識の習得は専らビデオや書籍に譲り、授業においてはレポート発表とディスカッションを中心とした。

教育理念については、教師自身の受けた教育や経験から離れることはできない。授業を行う上で、筆者が念頭に置くのは、アメリカの大学の授業において行われる活発な討論、その討論のために備える自学自習、そして、専ら討論の調整役としての教師の役割である。

まず、授業選択者に関する基本的な情報を述べる。定員100名に対して、履修者数は41名である。学部ごとの構成は、人文が7名、教育人間が8名、法が7名、経が6名、理が2名、医が4名、工が6名、農が1名となっている。これは2000年度の履修者が88名であったから、半減である。

理由としては、キャップ制の導入も考えられるが、テキストを5冊から7冊に増やしたこと、そして、初回の授業で、かなり読書好きでなければ履修すべきではないことを強調したことも影響していると思われる。結果としては、かなり意欲のある学生が履修することとなった。

次に、授業の構成を述べる。

I ビデオを見てのディスカッション

本来、ビデオ自体を授業に使うことは不適當であると考えられるが、現在の視聴覚設備では、学生が予め各自で予習とすることができない。止むを得ず、授業の半分近くを使って、ストーリーの核心部分を上映することとなる。

視聴後のディスカッションについては、こちらで5項目程度の議題を準備した。しかしながら、話の展開によっては、準備した議題にこだわらなかった。学生は、マイクを向けると結構発言するのであるが、自分から手を上げるということがほとんどない。何が話題になっているのかわからない学生も時々見られた。

最も残念なのは、議論の応酬という形には、ならなかったことである。他人の意見に対する学生の反応は、常に好意的なものであり、争点がぼやけてしまう。筆者は、かなり挑発的な姿勢で、学生に問いかけたのであるが、あまり効果はなかった。

全員に意見表明の機会を与える意味でも、出欠を兼ねた質問表を毎回提出させた。質問は、ビデオの内容に関して毎回二つ与えた。授業中は、短いフレーズでしか応答できない学生も、質問用紙には、意見をきちんと述べていた。これを評価することもできるが、他人の前で、発言ができるということも必要な能力であるという認識が欲しい。

他の学生の回答を整理して印刷して欲しいという希望もあったが、そこまでは手が回らなかった。今後は、メーリングリストの活用も考えたい。

II レポート

シラバス(資料1)にあるように、レポートの形式については、かなり細かな指示をした。同時に、採点基準としては、意見の内容よりも論旨の明確さを問題にすること、常識的な見解を覆すレポートを評価することを、最初に告げた。

レポートの質については、幅が大きい。これは、学年や学部には関係が無い。レポートの形式について、指示があるにも関わらず、一般論を展開するものや単なる感想を述べて終わっているもの、一方的な感情論がみられる。大学生活の早い段階での、レポート指導が望まれるところである。

レポートは、そのテキストを授業で取り上げる前に提出させた。これは、授業後に提出させると、授業の

内容に引きずられたレポートが多くなるためである。テキストの読了、学生独自の視点を引き出す意味でも、これは有効な方法であった。

レポートについては、よく剽窃が問題となるが、この授業に関しては、そのようなことはなかった。これは、題材が比較的容易で、どのような学生でも何らかの見解を示すことができたことによると思われる。

レポートをe-mailで提出させたことは、大変効果的であったと思う。採点者としては、レポートが読み易く、学生は、コメントと成績評価によって、次回以降のレポートを改善することができた。成績を返すことによって、「評価がおかしい」などというクレームがつく懸念を少し持ったが、そのような事例はなかった。

III 発表

毎回、レポートの中から、秀逸なものを5編ほど選んで、授業の中で発表してもらった。学生にとっては、他の学生からの問題提起の方が、教師からのものよりも、入っていきやすいようだ(教師の視点と学生の視点にジェネレーション・ギャップがあることは否めない)。さらに、発表を聞くことによって、どのようにレポートを書けば、論旨が明確になるかの参考ともなる。

発表は、順番に行ってもらうことも考えたが、やはり毎回優秀なものにした。そのため、毎回登場した学生もいる。レポート作成にしても、発表にしても、女子学生の方がてきぱきとこなす印象を持った。

発表をめぐるディスカッションにおいて、当初、筆者の役割を、明らかな事実の間違いの訂正にとどめようと考えていたが、結果としては、かなり自分でしゃべってしまったことを反省している。

筆者としては、あれにもこれにも触れておきたいと思うのであるが、考えてみれば、教養科目で、知識の注入を行うことほど無益なことはない。それよりも、学生自身の思考が深まることに配慮すべきであった。

学生同士のディスカッションについては、もっとうまい方法がないのかと考えている。9月5日に行われた研究会において、教育人間科学部の堀竜一先生より、「読書のアニメーション」についてご教示いただいた。

その中で、学生自身が他のレポートについてコメントすることや、鉛筆対談の手法は今後取り入れていきたいと思う。また、授業では、補足説明や参考資料と

して多くの印刷物を配布したが、今後はパワーポイントで代行することも考えられる。

今回の講義では、特別に、村上春樹の回で、人文学部の山内史朗先生に講演をお願いした。それは、村上を「自分探し」の観点から論じる学生が多かったからである。

山内先生には、体験を交えて精神科学に関する話をしていただいた。学生からは積極的な反応があり、ある学生は「社会的な評価と自己の充足感は一致しない」ということに共感を覚えたと述べていた。気軽に、授業を支援していただいた山内先生には、心からお礼申し上げる次第である。

IV 成績評価

成績分布は資料 2 に掲載した通りである。成績は、レポートに対する評価に出席状況や発表、授業中の発言態度を加味した。成績をつけるに当たっては、分布具合などは一切考慮していない。

評価の平均が 2.61 であったことは、自分でも驚きである。A と B が 6 割以上になっているが、毎回、1 冊の本を読み、レポートを書き、ディスカッションにも参加していた多くの学生にとって妥当な評価であると考えられる。C の学生は、レポート提出の数が少ないか、もしくはレポートに大きな欠陥があった者である。F は 3 回以上レポートの提出がなかった学生であり、登録のみの「掛け捨て」学生も含まれている。

成績評価で困るのは、レポートのみを提出して、授業に出てこない学生である。講義の最初で、この科目は、授業中の活動が中心であると述べているにもかかわらず、今回は、一人存在した。幸い、レポートの内容も平板であったので評価は B としたが、仮に優れていたとしても、A は与えられない。

全学 FD においては、1 学期に 7 冊も本を読ませるのは、あまりに負担が大きいという意見が他の教員から出たが、どうであろうか。文庫本を 2 週間に 1 冊読むという課題が、それほど過酷なものとは思えない。また、この講義においては、自ら調べるような課題を課した訳でもない。単位制の趣旨に則るためにも、どの授業についても、自学自習のための負担は求められるのではないだろうか。

V 授業評価

授業評価において、目立つことは、この授業のために、予習・復習をしたと答えている学生が少ないことである。これは、明らかにテキストを読んだり、レポートを書いたりする時間を含めることを忘れていていると考えられる。

出席が、平均して 3 分の 2 であると答えているのは、やや意外である。毎回 30 人ぐらいいは出席していたので、順番に休んでいたのだろうか。

授業内容に関して満足度が高いにもかかわらず、この講義を他人に勧めたいか否かという質問に対する答えが、やや勧めたいとなっているのはなぜだろうか。やはり、課題が多すぎると考えているのであろうか。

VI 学生からのコメント

授業評価については、誰か、学生にインタビューを行う第三者がいれば、評価項目ごとの理由を掘り下げることができるかもしれない。ここでは、授業評価の自由記述からいくつかコメントを紹介したい。

「現代社会における問題が取り上げられていて、男女平等に関する問題などにおける日米間の差異などについて興味のある人にとってはとても意義深かったと思います。映画やドキュメントなど、社会を映すものを題材に選んでいる点がすごくよかったです。」

「聞くだけの講義ではなく、発表したり、レポートの課題が出たりと頭を使う機会が多かった。」

「課題の本を読むのは大変だったけど、読んでいて楽しかったし、すごく自分のためになった。」

「こんなに自由に意見を言い合える講義は他にないと思う。映画・本を通して様々な知識を得、自分の意見を持つことができた。」

「忙しく、大変といえば大変な内容であった分、得たものは多かったです。また、日本の学校ではあまり自分の意見をのべる場がないけれど、この講義では自分の思ったこと、感じたことをいうことができたし、他の人の考え方もきけて、よい勉強になりました。」

「先生が、問題提起して、一方的にかける（当てる）と、自分があまり考えていないことを答えなきゃいけないような感覚にかられてしまうので、できるだけ生徒に自由に発言させた方がいいような気がする。」

「本をここまで読んで、自分の考えをレポートで表現できる授業はあまりなかったのでよかった。身につ

た授業だった。」

「本を2週続けて読ませるのはキツイ。映画を編集して時間内におさめた方がよいと思う。今までの方法だと結末が気になって眠れない。」

「レポートの提出締め切りを、土曜日ではなく、講義の前日もしくは日曜までにしてほしかったです。」

「授業中に眠らせてくれ」という要求は論外であるが、これらの感想からうかがえることは、この授業のスタイル自体が、かなり珍しいということである。筆者としては、双方向性のある程度実現できたと考える。

「自分探し」をしている学生のレポートには、よく「大学での受動的な学び」に対する疑問が提示されていたが、題材は簡単であっても、自分なりの意見が表明できるような場を提供することも、教養科目の使命ではないかと考える。

VII 最後に

9月11日にニューヨークで起きた大惨事は、対米観を根本的に変更させるものでもあった。アメリカの「構造的暴力」や単純な「善悪二元論」については、これまでも議論はなされていたが、あの事件ほど、これらの特徴が浮かび上がる契機も、近年なかったように思う。

この授業の目的の一つは、学生の持つ「自由の国アメリカ」のイメージを問い直すことであった。村上春樹も述べるように、「何でもあり」なのは、実は、日本社会の方で、アメリカ社会は想像以上に制約が多いのである。これは、「アメリカは自由。自由とは何も制約がないこと」と考えがちな学生にとっては、最後までパラドックスとして残ったようだ。

これは、日米の大学教育の違いについても十分当てはまる。今日の日本の大学教育における問題点を指摘するならば、強制はされないという「消極的な自由」が必ずしも、自ら何かを学ぶという「積極的な自由」につながっていないことが上げられる。

この講義においても、「自由にテキストを選ばせて

下さい」、「質問を限定しないで下さい（好きなように感想を書かせて下さい）」という学生がいたが、そういう学生に限って、お決まりの俗説をレポートで繰り返すのである。

これは、講義の最後の方でわかったことであるが、どうやら、この講義を受けていた学生には、二つのタイプがあるらしい。一方が、アメリカに対して積極的な関心を示すのに対して、もう一方は、日本の基準からアメリカを断罪することばかりを繰り返していた。

気になったのは、後者がアメリカ社会に対する理解をほとんど欠いたままであることである。価値判断より先に、日本について、あるいは異文化について学ぶべきことはまだ多くあると思うのだが。

アメリカを題材とした「比較文化」であったが、最終的な争点は、「無縁社会」アメリカ対日本「共同体」であったようだ。学生のアメリカを見つめるまなざしは、常に日本「共同体」の与える安心感と束縛感と裏腹になっている。

ある学生は、同じような形式の授業をヨーロッパやアジアについても、行なって欲しいという希望を述べていた。これは、多元的な視点を形成する上でもぜひ必要であると思われる。他の先生方によるご尽力を期待する次第である。

参考文献

山内志朗、『論文マニュアル』、平凡社新書、2001年。
土屋恵一郎、『正義論／自由論』、岩波書店、1996年。
立花隆、『東大生はバカになったか』、文藝春秋、2001年。

P.J.パーマー、『大学教師の自己改善』、玉川大学出版部、2000年。

池田輝政他、『成長するティップス先生』、玉川大学出版部、2001年。

モンセラット・サルト、『読書のアニメーション』、柏書房、1997年

資料1 シラバス

G2013 比較文化 火2限 G415 吉永契一郎 教養校舎 A123

目的

- ①アメリカ社会を知る
- ②アメリカ人の対日観を知る
- ③日本人の対米観を知る

講義形式

- ①ビデオを見てディスカッション
- ②テキストを読んでディスカッション

課題

レポート7回

スケジュール

4/10	ビデオ「敵国ニッポン」	
4/17	映画「Do the Right Thing」	
4/24	映画「American History X」	
5/1	講義なし	
5/8	ルース・ベネディクト「菊と刀」現代教養文庫	レポート締め切り 5/5
5/15	司馬遼太郎「アメリカ素描」新潮文庫	レポート締め切り 5/12
5/22	映画「Forrest Gump」	
5/29	三浦久「追憶の60年代カリフォルニア」平凡社新書	レポート締め切り 5/26
6/5	ビデオ「アメリカ大学受験戦争」	
6/12	藤原正彦「若き数学者のアメリカ」新潮文庫	レポート締め切り 6/9
6/19	映画「Good Will Hunting」	
6/26	村上春樹「やがて哀しき外国語」講談社文庫	レポート締め切り 6/23
7/3	映画「Joy Luck Club」	
7/10	村上由見子「アジア系アメリカ人」中公新書	レポート締め切り 7/7
7/17	ビデオ「Gloria Steinem」	
7/24	桐島洋子「淋しいアメリカ人」文春文庫	レポート締め切り 7/21

注意事項

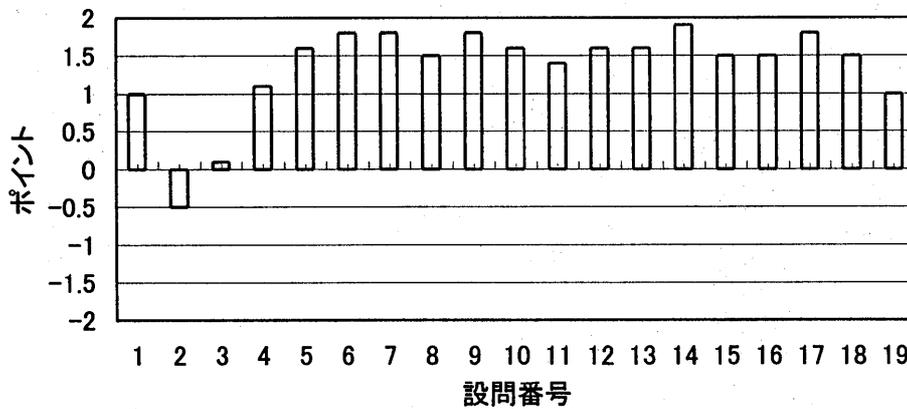
- ・ 毎回質問形式で出席を取る。
15分以上の遅刻は出席と認めない。
- ・ テキスト7冊は早めに生協に注文すること。
図書館で借りたり、友人同士で共有してもよい。
- ・ レポートの提出はe-mailが望ましい。宛先はshukudai@excite.co.jp
e-mailで提出の場合はコメントと成績が返信される。
e-mail提出ができない場合は教養校舎A123研究室のボックスに提出すること。
締め切りを過ぎたレポートは減点とする。
未提出のレポートが3回で不可とする。
- ・ レポートは本の要約ではなく、特に興味を持った2-3の事柄を選んで、ユニット形式で意見を述べる。
一つのユニットには
 - ①見出しをつける。
 - ②何ページに書かれているどういうトピックについて論ずるかを明記する。
 - ③自分の意見を述べる。単なる感想ではなく、他の個所の記述(ページ数記入)、著者の触れていない事実、自分の経験に即して議論する。このようなユニットを2-3提出する。

資料 2 授業評価と成績分布

授業評価 (回収率 29/41)

- 1 この講義にはどのくらい出席しましたか。
- 2 この講義を受講する前に、講義内容についての予備知識があった。
- 3 この講義のために授業時間外の学習 (予習・復習) をした。
- 4 講義中、居眠りや内職をしなかった。
- 5 講義の主題 (テーマ) は明確だった。
- 6 講義の内容は興味深かった。
- 7 講義はシラバスのとおりに進められた。
- 8 講義の内容・説明はよく整理されていた。
- 9 この講義により、自分の考え方がつちかわれたり、得るところがあった。
- 10 教員の話し方 (速さ、声の大きさ、明確さ等) は適切だった。
- 11 黒板や OHP の使い方は適切で、文字や図表は見やすかった。
- 12 講義は学生の反応を見ながら進められていた。
- 13 教員が講義に熱意をもっていると感じた。
- 14 教員が学生の質問を促し、学生の意見に耳を傾けようとしていた。
- 15 講義室の状態 (広さ、明るさ、室温等) は適切だった。
- 16 学生数は適切だった。
- 17 講義のじゃまになる私語、雑音はなかった。
- 18 この講義を受講して総合的に満足している。
- 19 この講義の受講を友人や後輩にもすすめたい。

ポイント値のグラフ



成績分布 (平均2.61)

